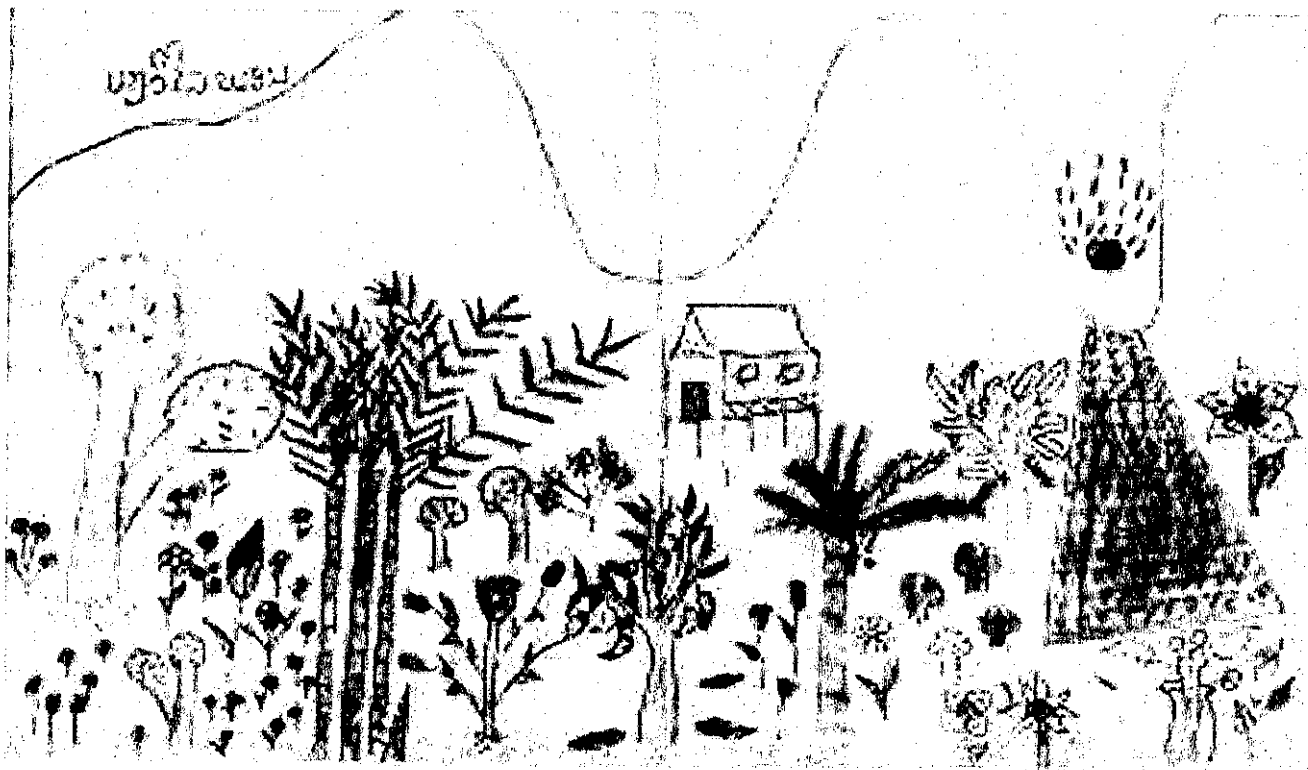


じゃっと新聞

平成16年3月8日



ホアクワ小学校の子供が書いてくれた絵と
その女の子(ビライフォンちゃん)

この2月末で吉田いつ子氏が日本に帰国します。彼女をリーダーに2002年7月から2003年6月まで、JICA 小規模開発パートナー事業として活動。続いて JICA の KIDSMILE プロジェクトの委託を受けて活動。これらの活動は、“じゃっと”にとって、とても大きな事業でした。事業開始前にラオス国との交渉など苦勞した藤島美由紀さん、サーヤさん、そして2002年4月から吉田いつ子さん、2003年7月からマイさんが加わり古閑由佳里さんにもお手伝いいただきました。ヴィエンチャンで実施した小規模開発パートナー事業である「鉤虫対策プロジェクト」は、ヴィエンチャンにいらっしゃる専門家(斉藤さん、奈良さん、瀬筒さん、村方さん、元ラオス生まれ日本国籍の歯医者さんである十和田さん、他にも大勢)の方々のご協力を得ました。ありがとうございました。

そして、これまでの人的繋がり全く無いウドムサイ県で、JICA から委託事業「School visit activity with school health education package in Oudomxay」を実施しました。ウドムサイでは、吉田さんはセンチャン(月の光)という

きれいなラオス名を、借りた家の大家さんからもらいました。また、少数民族の多い地域でしたが、モン族の世界的な(モン族はアメリカ他世界に広く住んでいます。)会の会長さんから正月の招待を受けました。短い間にウドムサイの人々の生活の中に入ってたくさんの方を得たのです。そのことが、このプロジェクトを成功させた大きな要因だと考えます。いつこさん、美由紀さん、サーヤさん、マイさんのおかげさまで、“じゃっど”は、ラオス国で、高い評価を受けました。これを、ラオス“じゃっど”のソムチット医師たちが広げていってくれることでしょう。

昨年度の“じゃっど”の活動は以下の担当で行われました。

ヴィエンチャン首都特別区:Dr. ソムチット、Dr. コンサップ、Dr. マニパンが担当

サニャブリ県:Dr. カンマン、Dr. アムポーン(マダム カンマン)が担当

ボケオ県:Dr. ソンポーンとマダムソンポーンが担当

ウドムサイ県:吉田いつこ、サーヤ、マイ

12月の“じゃっど”視察では、ボケオ県フエサイ市で、マダムソンポーン(ラオスはフランス領だったので、奥さんのことをマダムと呼びます。)がボケオ県保健局長と待っていてくださるところへ、ヴィエンチャンから Dr. コンサップ、Dr. マニパンが、ウドムサイ県から吉田いつこさん、サーヤさん、マイさんがウドムサイ県の教育局のバンカム先生も連れて、そして鹿児島から久木野さん、松永さん、永松さん、小幡理事、帖佐が行きました。“じゃっど”の活動スタッフがボケオに集まりました。サニャブリ県から来られなくて残念でした。

ボケオ県では、県の保健局のペンシー先生(女性)が、少数民族への助成が必要とボケオ県の特徴を説明し、これまで、“じゃっど”の資金で町中の小学校へ健康教育を行った。“じゃっど”の事業と同じことを、他から資金を得て30校に行った。304校ある小学校のうち、今年度は50校への援助を“じゃっど”の資金で行いたい。視察の後で、評価をして欲しいと言われました。これまで、お役所はただ挨拶だけで、現場の先生たちの様子を見せていただくことがほとんどでした。視察の後、話し合いを持ってくださったのは、初めてでした。話し合いの席でも資金援助要請ではなく、ボケオでやろうとしていることの説明でした。視察団からの意見にも耳をかたむけていただきうれしかったです。視察団からの意見は以下です。久木野氏(親を巻き込んだ衛生教育が望ましいのでは。きれいな水の確保が大切。(衛生教育が正しく伝わることで良い習慣を見につけてほしい。))松永氏(子供たちの集中力の持続力に驚いた。“じゃっど”衛生の歌をすぐ覚えてくれた。これは地域へ親へと伝わるだろう。))小幡理事(視察した学校はごみが無いことに驚いた。学校によっては、シャツの洗濯ができていない。親の理解が必要。継続が必要と思う。))帖佐(県の保健局と教育局と一緒に活動が始まっていることを認識した。))

ボケオ県では、小学校の視察と同時に、ウドムサイからのスタッフが“じゃっど”開発の紙芝居を使った保健授業をデモンストレーションしました。ボケオ県の教育局、保健局にみてもらい、ヴィエンチャンの“じゃっど”スタッフが感想を述べて大変有意義なボケオ視察でした。

このあと、ヴィエンチャン、ウドムサイと視察して帰国しました。ヴィエンチャン、ウドムサイについては、視察団からの報告をごらんください。

吉田いつ子さんから届いた報告書は、特集号を組んで皆様に紹介したく存じます。待ってください。

(帖佐理子)

03年ラオス活動視察ツアーに参加して

学校栄養士 小幡順子

今年度の視察ツアーは、ビエンチャン市内中心の活動を見るこれまでのツアーとは違い、田舎の方をまわるといふ事でまたまた参加させてもらいました。

皆さんご存知の通り、今年度は KIDSMILE キッズスマイルの下請け活動という形でウドムサイ県において保健衛生指導キット（セット）の活用運動を行っています。そのウドムサイ県と、かねてよりラオス人スタッフによる独自の衛生指導セミナーを続けているボケオ県、そしてビエンチャン市内の学校の視察を行いました。

12月21日（日）日本発～バンコク経由～チェンマイ着。翌日、タイの整備された国道を一路国境の町チャンライへ到着。これが国境と拍子抜けしてしまうほど狭いメコン川を1人30パーツ（約90円）払って、3分間のボートの旅を終えるとそこはラオス。ボケオ県の県都フェーサイです。ウドムサイから車で2日かかりで先に着いていた吉田さん、サーヤさん、マイさん、ウドムサイ教育局の先生、そしてヴィエンチャンから先に飛行機で来ていたコンサップ医師とマニパン医師（2人ともじゃっどラオスのリーダー）が船着場まで迎えに来てくれました。（まだ入国審査もしていないのに、私たちの荷物はホテルへと次々と運ばれていきました。いいのかな～）

入国審査後、遅めの昼食を取った後、今回お世話になるボケオ県保健局へ挨拶に行き、その後、ボケオ県少数民族学校でのデモンストレーション（以下デモ）に出かけました。

この**ボケオ県少数民族学校**は、少数民族の肉親のいない子や、いても子どもを学校に行かせる余裕のない家の子どもを対象とした小学4年から中学3年生の五学年約280名が寄宿生活をしながら学んでいるところです。学校側の説明・案内の後、国旗掲揚代の前でじゃっどのスタッフとウドムサイ県教育局によるデモが行われました。当初、私たちは小学4～5年生だけを対象に行いたいと学校側に伝えたのですが、良い事だからと手の空いている学年すべてと職員も多く参加してのデモとなりました。その時、メインになるスタッフのサーヤさんのみによるデモの予定でしたが、対象が増えたため打ち合わせもしないのにさっとスタッフのマイさん、ウドムサイ県教育局バンカム先生がそれぞれ紙芝居を持って並んで立ち、小さな紙芝居の絵が皆に見えるように配慮した姿は日頃の活動の様子が伺われて、ウドムサイでもいい活動しているのだなと感じました。

デモの後は、学校職員が手弁当で行っているエイズ撲滅キャンペーン芝居のさわりを上演してくれました。言葉はわかりませんが、無知識から感染していく過程がわかる創りになっているようでした。

翌日23日（火）はフェーサイの街中にある**コーン・クオ小**でもデモを行いました。五学年を3人の現地スタッフが手分けしてまわり、紙芝居や歌、話で衛生の大切さを伝えていました。この小学校は少数民族が主体の学校で、校長先生によると、1年生で入ってくる時はあまり服も洗わず衛生ということに無頓着な子が多いのだが、学校が行う「じゃっどセミナー」のカリキュラムを続けていたところ、学年が上がるごとに身の回りのことに気をつけるようになり、身綺麗になっていくということでした。

フェーサイでの活動対象校2校とも過去2年間に行われた「じゃっどセミナー」の対象校で保健局からこの学校でデモを行ってくれと推薦のあったところです。そのせいか、先生たちの意識も高く教材に対する興味も高いように感じられました。このフェーサイは、非常に保健局長さんの熱意が伝わる地でした。2校の活動後もまた話が聞きたいと保健局へ呼ばれ、今後フェーサイでの学校保健で何が必要か意見を言ってくれと聞かれる姿は、今ラオスの子どもたちに正しい知識を持たせる事で、地域や社会の衛生基準を高めたいという熱意が伝わってくる事でした。

翌日、ウドムサイからのメンバーはまた車でウドムサイへと2日間の旅を始めました。私たちはコンサッ

プ医師、マニパン医師とともに非常口には英語・中国語・ラオ語の3種類の表示がある17人乗りのプロペラ機に乗り込み、首都ビエンチャンへ移動しました。後で行くウドムサイ県の端を飛ぶのですが、空から見るラオスは本当に「森の国」という数々の名称を思い出すほど、山と緑だらけです。そうした山の山腹や山上には、これまた民俗学で言うところの「環濠集落」の典型のような村が見えます。その村には車が通るような道はなく、人が踏みしめたような細い道があるだけです。これだけ、周りと隔絶している暮らしとはどんなものなのだろうと考えているうちに飛行機はビエンチャンへと着きました。

12月24日(水)、まずサムケット小学校への駆虫薬投与のお手伝いに出かけました。私たちの乗った車が学校敷地内に入った途端、子どもたちは慌てたように裏手たった一個ある水道蛇口に飛びつき、手を洗ったり口をすすいだりしています。何かと見ていると、同行のコンサップ医師が笑いながら「私たちが健康診断などに来る時、いつも歯を磨いているか？ 手は洗ってあるか？ と言っているからだよ。」と教えてくれました。コンサップ医師を初めとする現地スタッフの活動の一端がわかるほほえましいエピソードです。

学校横の日陰に駆虫薬やご褒美の豆乳・文房具を並べて、5年生から投与を始めました。子どもたちが飲むタブレットは大人でもどうかと思うほど大きく、低学年になるとどうしても飲み込めずに涙目になる子どもも見受けられました。

駆虫薬をすべての子どもに飲んでもらい、先生方の分と今日休みの子どもの駆虫薬を預けたら、次は机椅子募金で頂いた机に記名を行いました。

この後、もう一校ホアクア小学校へ移動しここでも机椅子への記名を行いました。今回は自分で募金した机椅子も含まれていて、ちょっと嬉しい記名作業でした。

そして、時間があつたので昨年の対象校サムケート小学校へ伺いました。昨年のツアーの際、出来たばかりのトイレやポンプを見せてもらった学校です。一年の間にトイレはどうなっているのか心配だったのですが、とても綺麗に使われていて、その上トイレの回りにバナナを植えるとコンクリートが傷まないとかで、トイレの周りにはバナナの木が何本も揺れていました。去年はなかった泥棒よけのポンプ柵もとても丈夫なものが作られていて、地域の人が学校に寄せる関心の高さが伺えます。

何より驚いたのは、すでに授業時間を過ぎた時間に訪問したのですが、教室には残って勉強している子どもが何人もいるのです。何かと尋ねると補習を行っていると言う事でした。ラオスの学校は試験による進級制、落第も当たり前前の制度です。この落第を機会に学校へこなくなる子どもも多いといえます。そのような事のないように、先生方が頑張っていられようでした。

翌25日(木)今年の活動地ウドムサイへ移動です。空港には、ボケオ県フェーサイから二日ばかりで帰ってきていた吉田さん、サーヤさん、マイさんが待っていてくれました。到着後、早速、サイ郡ロンヤー小学校への視察に出かけました。このロンヤー小学校はルウ族といわれる少数民族の村にある小学校で、02年に村人が力を合わせて作り上げた竹で編んだ壁の学校です。それまでは6km離れた隣村まで通っていたそうで、そのせいで読み書きを習い終わる3年位で退学してしまう子どもが多かったそうです。5年生のクラスを見ると「これが小学5年生？」と思われるほど大きな子、特に女の子が目立ちます。村に学校が出来た事で、再び学びだした年齢の高い(中には16歳も)子どもたちでした。

授業参観をさせてもらった後、スタッフによるフォローアップ活動が行われました。紙芝居やカセットレコーダーから流れる歌に目を輝かせながら反応している姿に、教育の原点みたいなものを感じたのでした。ちょっと笑えたのが、サーヤさんが「みんな、お腹に寄生虫がいないかな？」と尋ねたところ、低学年などは一斉にお腹をおさえて「ちょっといるかも～」と恥ずかしそうに答えていた事。言葉が通じるともっとこの子どもたちと話がしたいなと、思われる優しい笑顔の学校でした。

ウドムサイではサイ郡、ラー郡、そしてベン郡で活動しています。翌 26 日はベン郡の主要幹線沿いに移動しながら対象校を覗いていきました。というのも、金曜日はこの地において「小さな土曜日」と呼ばれていて、お昼前には授業が終わるのが慣例になっているそうです。おまけに訪ねたこの時期はモン族のお正月に当たり、モン族の多いサイ郡では休校になっているところが多いので、覗かせてもらうしかないようです。

まず、ベン郡教育局へ挨拶に出かけました。教育局の壁にはベン郡内の小・中・高生の人数表が書き出してあったのですが、その進学率の悪さには愕然としました。特に少数民族である、セム族やモン族は学年が進むごとに人数が減っています。モン族の女高校生といったら 1 人しかいませんでした。「1 人でもいる事がすごい事なんだよ」との吉田さんの言葉には、国や環境の違いにしばし言葉を失ってしまいました。

その後、トイレはあるけれど水確保のために近くの川まで交代で水汲みをしているという**タカット小学校**へ訪問しました。ちょうど、帰りの会をしている時間だったのですが、日本のように歌を歌って閉めという感じで歌いだしたのが、今回活動の際指導している「アナマイ（ラオス語で衛生の意味）」の歌でした。私たちの姿が見えたからかなとうがっていたのですが、吉田さんによると市場で買い物していると、近くを通る子どもが口ずさんでいるのに気づき嬉しくなるのだと話してくれました。この半年の活動状況がわかるというものです。

学校が水汲みを行っている川は、学校から 2~300m 離れたところにあり、学校だけでなく、村全体の水汲み場となっているとてもきれいな水の流れる川でした。しばらくの間見ていると、うんと上流ではお坊さんが沐浴をし、上流では子どもが水汲みをし、少し下では野菜を洗い、その下では洗濯や沐浴を行っていました。なんとな〜く住み分けが出来ているのかしらと、しばしラオスの青空と川の音に酔いしれた時間でした。

私たちは整備されたミニバスで二日間学校視察にまわったのですが、思っていた以上にすれ違う車が少なく村と村の間は遠く、思わず「じゃっどセミナーに、先生たちはどうやって集まったの？」と質問すると、やはり移動は徒歩が中心で運がよければ通りかかった車などに同乗して来るのだという事です。夜も明けぬうちに村を出て歩いてくる先生も数多くいるということでした。

今回の活動もスタッフの移動などを考え道路沿いの学校しか対象にできなかったそうです。事務所で見せてもらった活動地の地図には太線の道路と、人しか歩けない点線の道路がありました。その点線の途中にも村があり、それぞれに学校があるそうです。スタッフのメンバーは、休みの日などを利用し、その対象外となってしまった学校へ出かけているそうです。嬉しい事に、活動に賛同する県職員のラオス人なども手弁当で参加して協力しているそうです。いかに今回の活動が評価されているがわかるというものです。

さて、色々と感じることの多かったウドムサイを離れ、ビエンチャンへ移動しました。27 日（土）には NPO「**シャンティ**」、28 日（日）には NPO「**ラオスの子ども**」やお世話になっている **JICA 事務所**などを表敬訪問し、帰国の途につきました。

こうして私たちの視察ツアーは終わったのですが、今回のツアーは刺激が強すぎたようでうまくまとめる事が出来ません。少数民族のこと、先生方の意識のこと、変わり行くラオスの暮らしの事、考えれば考えるほどわからなくなる事ばかりでした。結構、関係書物などに目を通し、わかっているつもりになっていたのですが、現実はかなり厳しかったというのが本当のところでした。シャンティの方が話していた「今すぐこの国が変わるとは思っていません。しかしここで本を読んで、本の楽しさを知ったこの子どもたちが大人になる時、この国は変われると思います。」という言葉に反芻しながら、今後の活動を考えていこうと思っています。

初めてのラオス訪問。じゃっどの会を通して関係する人々の、子ども達への情熱がとても強く心に残りました。

1週間ぐらいのラオス滞在でしたが、フェーサイ・ウドムサイ・ビエンチャンの学校やボランティア団体の事務所を訪問する度に、出会った方々のラオスへの熱い思いに触れて、地域の人々のために、子ども達のために一生懸命考え実現できるよう取り組んでいかれている姿が焼き付いています。

出発前の話し合いで聞いたラオスの子どもはどんな子ども達だろう。学校はどんな様子なのだろう。と想像しながら行きました。

ラオスの子ども達は、とても素直で話を聞くのがとても上手でした。じゃっどのサーヤさん達の衛生についての紙芝居や歌を、熱心に聞き入っているのがすごいなあと驚きました。薄暗くなるまでやった学校の子ども達は、長時間になっても騒ぐ子もなく延々と続く感じでした。それは、サーヤさん達がきれいな声で、子ども達を引きつけていたからかもしれません。

「アナマイ♪アナマイ♪サムサハート♪」この歌を5・6回、紙芝居の後歌った学校もありました。回を重ねる度に声も揃い元気よく歌っていました。

みんなで紙芝居を見たり歌ったり、楽しい一時を過ごせるのもいいなあと感じました。この楽しさは、きっと各家庭でも話題になり、歌は口ずさまれ紙芝居の話も心に残っていくことだろうと思います。

「楽しさ」には、私達を引きつけ心を豊かにさせるものが多くあります。今、わたしのまわりの子ども達には、聞き上手ではない子がふえています。話す人の方に心が向いてない子が多くいるような気がします。今の日本の社会環境からかとても残念でなりません。

ラオスの子ども達は、とても新鮮でとても素直だなあと思うことでした。休み時間にはゴム飛び、そして川遊び、水汲みとよく手伝い、よく外遊びをしている姿が見えました。

一昔前の私達の幼い頃の子ども達のような気がし、なんだか懐かしささえ覚えました。一方、お国柄か。素足に近い状態で（暑い国なのでしかたがないことなのでしょう。）薄汚れた服を着ている子も大勢いました。話には聞いていましたが、回虫や寄生虫がいて顔色の悪い子やお腹が妙に膨れている子もいました。サーヤさんが「お腹に虫はいないかい。」と尋ねると「すこーし」という返事が返ってきておかしいでした。

学校訪問した校長先生の話に、じゃっどのプロジェクトが入って、子供たちが、爪を切るようになった。服を洗ったり掃除をしたりするようになった。セミナーを受けた先生方が、寄生虫が口から回虫が土からと話が出るようになった。と喜んでおられました。しかし、学校には課題がまだまだ山積みあるようです。

教材が少ないこと。（教科書がなく先生の聞き伝えで授業がされていました。）

トイレの設備が不十分なこと。

水が乾期には涸れて川まで水くみにいくこと。

窓、黒板、机が不十分。

子ども達の学校環境には改善の必要がたくさんあるようでした。

この旅行中、子供文化センターも見学しました。壁絵をみんなで描いたり、小物を作ったり、輪になってダンスしたり、読書したりしている子ども達。とてもいきいきと楽しそうでした。ただ、残念なことに本がとても少ないでした。ビエンチャンにある日本のNGO図書館は冊数もかなりあり、ラオスの言葉に翻訳されしっかりした絵本が揃っていました。しかしフェーサイでは、雑誌のような本が少しあるだけでした。この雑誌のような本を声に出し熱心に読んでいる子ども達は印象的でした。

「幸福な生活の基本は、健康である。」という言葉がありますが、ラオスの子ども達への健康意識付けの保健教育はとても大切なことであり、ボケオ県の局長さんも強調しておられましたので、できる限り多くの県に紙芝居・CDが配布され浸透できるといいなあと感じます。そして子ども達が求めている絵本を、ラオス語に翻訳し届けることは私達にもお手伝いできるのではないのでしょうか。

ラオスタディツアーに参加して

看護学生 永吉 ゆ希

開発途上国について関心がある私にとって、今回ラオスを訪れ、JADDO の活動の実際を目にすることは大変有意義なことであった。

学校に寄付された机の前では多くの子どもたちが目を輝かせて座り、わずかな教科書を広げていたり、一生懸命にノートに書き物をしていたり、隣の子と楽しそうに話をしたりと子どもらしい姿に出会うことができた。

またトイレに関しては十分に使いこなせている学校とそうでないところとあった。しかし、トイレで用を足すという概念がなかった土地で設置されたトイレを明らかに使用している形跡があることは素晴らしいことではないだろうか。

今回は子どもたちに駆虫剤を投与する場にも、立ち会うことができた。子どもが飲み込むには大きい錠剤を拒否することなく服用する姿は、自分のお腹の中には虫がいるかもしれない…ということを幼くとも理解していることの反映なのだろうと感じた。またこの時にミルクを配布したが大半の子どもが「家に帰ってから兄弟と分けて飲む」と言う姿に言葉にしがたい思いを抱いた。心の素直さや優しさが伝わった瞬間であった。

さて、数校で「かみしばい」による健康教育の実際を見せていただいた。デモンストレーションをされる方の上手さに子どもたちは勿論一生懸命に目と耳を傾けていたが、言葉が分からない私でさえも食い入るように見入ってしまった。子どもたちに何かを理解させようとする時にはどのように興味・関心を抱かせるかが鍵となるがその最初のステップは好調だと思えた。しかし、これから先、「かみしばい」が単なる[楽しみ]で終わっては意味が無い。意とすべきことが伝わり、子どもたちの健康を維持する糧となるようその都度フォローが肝心である。また、伝えていく中で異なる解釈をされたり、間違った情報・知識が混在しないようにすることは大切であるが、そのためには教師や親、共に生活を共にする人々にも正確な情報と知識を広めなければならない。Child to child は理想的な姿であるが、理想的であるが故に様々な障害と出会うことだろう。

ラオスではいろいろな形・分野でのサポートを必要とし、またそれらをきちんと受け止めようとしているが私たちは闇雲に提供するのではなく、本当に必要なサポートであるか吟味し、どのようなサポートとフォローをしていくかを考え、それらが彼らにとって習慣となり自分たちで発展することができる力を持つまで継続した活動が必要である。しかし、一方的な提供はすべきでなく、彼らのもつ伝統的な習慣や風習を壊すことが無いよう十分に配慮すべきである。

今回のツアーでは JADDO の活動に触れるだけでなく、ラオスの人々や生活にも触れることができたことは何事にも換えがたい体験であった。そして途上国の現状を知ると共に私自身に足りないものをあらためて自覚させる場ともなった。

この機会を与えてくださった多くの方に感謝申し上げます。

加世田小学校での開発教育の報告（実施日 平成 15 年 11 月 14 日）

2 回目の訪問でした。今年の 6 年生には、ラオスのこと、“じゃっど”の説明のほかに「世界が 100 人の村だったら。」をもとに話をしました。

* 世界を 100 人に縮めると、50 人が女性です。48 人が男性です。

* 30 人が子どもで 70 人が大人です。そのうち 7 人がお年寄りです。

* 61 人がアジア人です。13 人がアフリカ人、13 人が南北アメリカ人、12 人がヨーロッパ人、あとは南太平洋地域の人です。

* 20 人は栄養がじゅうぶんではなく、一人は死にそうなほどです。でも 15 人は太りすぎです。

* すべての富のうち 6 人が 59% をもっていて、みんなアメリカ合衆国の人です。74 人が 39% を 20 人が、たったの 2% を分けあっています。

以上の割合にあわせて、加世田小学校の 6 年生 128 人にグループに分かれてもらいました。男性のカードの下に集まる。アジア人の札の下に集まる。などは、おもしろく分かれてくれました。最後におせんべい 100 枚を世界の富とみなし、たった 8 人がせんべい 59 枚を確保してしまったことには、かなり抵抗があったようでした。最貧となる 25 人には 2 枚でした。

最後は全員、せんべいを一枚ずつ分けました。世界の富が、このように分配されることがあるのでしょうか。すこしでも公正に近づくと良いなあと、加世田小学校で「世界がもし 100 人の村だったら」の体験をしてもらいました。

彼らの感想です。

☆ラオスは日本より貧しいと思うけど、食べ物を分け合ったりすることなどを聞いて、とても思いやりのある国でいい人ばかりなんだろうと思います。これから僕たちもいろいろ活動するけれど、じゃっどみたいに喜んでもらえるような活動をしたいと思います。

☆日本はかなり無駄使いをしているので、少しでも他の国にえん助できるといいなと思います。

☆私は物を大切に健康で安全に暮らせることに感謝したいと思います。また何かお手伝いできることがあれば、お手伝いしたいと思います。

☆トイレは見た目はあまりよくないと思っていただけ、話を聞いてみると、とてもきれいなトイレなんだと思いました。僕はラオスの話を聞いたら、もっと他の話も聞いてみたくまりました。

☆ラオスのことで一番驚いたことは校舎が小さかったことです。でも大きい校舎もあるようです。

等など、紙面では紹介しきれないくらい沢山の感想をもらいました。加世田小学校では、昨年先生方が、ラオスのことを伝えてくださり、6 年生が中心となってお金や文房具を集めてくれ、じゃっどに寄付していただき、12 月にラオスに届けました。ありがとうございました。



【国内活動】

- 11月7日(金) *平成15年度NGO活動状況報告会(あなたの町の郵便局、川内市国際ボランティア貯推進協議会主催) 小幡順子理事(川内中央公民館にて)
- 11月15日(土) *ホームページ更新 神崎絢子さん(高校生)にいただきました
- 11月17日(奇数月 第3月曜日) ジャっど会(増岡さん、久木野さん、小幡理事、古田理事、帖佐)
*12月ラオス視察の日程の確認、持っていく物の確認、継続活動の為に助成金を申請中、ラオス(ウドムサイ地方)は寒いのでほっかいろ、ゆだんぼを事務所から吉田さん、古閑さん、サイヤさん、マーヤさんに送った。
*学習会「学校は建てても学校へ行けない」(小幡理事が担当)
- 11月25日(火) *加世田小学校(開発教育)6年生に帖佐会長講話(会員の高橋真弓さん同行)
- 12月13日(土) 臨時のジャっど会(ツアー打ち合わせ会) (永吉さん、松永さん、久木野さん、小幡理事、古田理事、帖佐、宮脇)
*参加者5名の自己紹介、視察中の仕事の分担、寄付の文具、バスケットユニホホームを分けて持っていく、サーズ予防のマスク持参、お正月用のおもち、しめ縄などのかざりを手分けして持っていく事にする。
- 12月20日~12月29日 *ラオス視察ツアー(永吉さん、松永さん、久木野さん、小幡理事、帖佐)
- 1月18日(日) *ホッピー通り川内かつぱ市主催のホッピー祭り(毎月第3日曜日に開かれています。)で古田理事が、この日はチャリティーコンサートを企画、お願いして机、いす募金の寄付金活動。
コンサートは高校生バンドから川内のプロとアマチュア、東京からのプロ計13の出演のグループがあり、皆さんラオスの学校へと演奏してくださいました。演奏を聴きにきた方々が、高校生も一緒にたくさんの寄付をくださいました。ありがとうございます。企画運営して下さったホッピー通り会の皆様、ありがとうございました。
- 1月19日(奇数月 第3月曜日) ジャっど会(伊東さん、神崎さん、小幡理事、古田理事、帖佐、宮脇)
*視察報告会について、ラオス雑貨の値段つけ、販売について、ジャっど会、国内イベントなど国内活動の参加者が同じメンバーになってきているが、もっと多くの会員にジャっど会や活動に参加してもらう方法はないか検討。主婦などが参加しやすい昼の時間帯に気軽に参加できるような会を企画したい。
- * 偶数月 第4土曜日 午後1時から3時まで 事務所(寿泉堂)にて どなたでも参加可能な活動日も設ける事になりました。 奇数月 第3月曜日 午後7時~8時半までのジャっど会は従来通り定例会として行います。会員の皆様ご賛同いただきご協力、ご支援ください。
- 1月24日(土) *ラオス雑貨の値段つけ(三本さん、小幡理事、宮脇)
- 1月31日~2月1日 *NGO-JICA合同ワークショップ(大分・湯布院にて)
帖佐会長がJICA小規模開発パートナー事業の報告
- 2月17日(火) *九州電力生活協同組合鹿児島支所より寄付金の贈呈式
- 2月28日(土) 偶数月第4土曜日 *ジャっど会(松永さん、増岡さん、小幡理事、帖佐、宮脇)

【事務局からのお知らせ】

感謝の気持ちとともに、ご支援ご協力くださった皆様のお名前を記載させていただきます。(以下敬称略)

新規会員 (2003年11月～2004年2月)

サイヤ キエンペット (ラオス)、北住信子 (川内市)、松永由里子 (阿久根市)、虎頭恭子 (鹿児島市)

平成15年度会費 (2003年11月～2004年2月)

安永健次郎、矢野信之、飯尾茂樹、北住信子、帖佐理子、安部良宣、瀬戸山弘子 (川内市) 橋本晴美 (長崎市) 藤島美由紀 (愛知県)、サイヤ キエンペット (ラオス) 帖佐徹 (中国)、松永由里子 (阿久根市)、虎頭恭子 (鹿児島市)、

寄付金 (2003年11月～2004年2月)

九州電力生活協同組合鹿児島支所 (鹿児島市)、小幡順子、帖佐理子、北住信子、若松記念病院、村役場 (お店の名前) (川内市)、

* 1月18日 (日) 川内市向田町のホッピー通りにて行なわれた、チャリティーコンサートで、41454円のご寄付をいただきました。

机、いす募金 (2003年11月～2004年2月)

小林義郎 (東京都)、小屋一美 (串木野市)、飯尾茂樹、北住信子、浅海美知子、西田美根子、田中真由美、栗須みゆき、増岡淳子、中園照美、鮫島綾子、永里義幸、村役場 (お店の名前) (川内市)、山口安弘、勝浦裕司、小管祥 (鹿児島市)、松永庄司、松永由里子、阿久根農業高等学校家庭クラブ (阿久根市)、山の学校 (川辺郡)

* 次回のじゃっど会は、3月15日 (奇数月 第3月曜日) を予定しておりましたが、お休みにします。

平成15年度 (財) ひろしま・祈りの石国際教育交流財団の助成金を申請致しましたところ、調査、審議の結果、2月24日に助成金額130万円が正式に決定いたしました。

～～～ ボランティア募集 ～～～

新幹線、おれんじ鉄道開通祝賀イベントとして、川内市内駅周辺、向田付近でコンサート、いろいろなお店が出店予定です。その1ブースを借りてチャリティーバザーを計画しました。そこで、ラオス雑貨 (天然綿の布など)、オリジナルTシャツ販売をしてくださる方を募集 (2時間程でも結構です) します。会員以外の方も大歓迎です。じゃっど事務局 (宮脇) までご連絡下さい。また、今回のラオス視察で沢山の布など仕入れてきましたので、今回企画のチャリティーバザーにも是非お越し下さい。

日時: 3月13日 (土) 10時～17時 (特に、9時からの準備に数名のお手伝い人募集中!)

場所: Gキャッピー (川内山形屋向かい側)

じゃっど事務局

電話、FAX: 0996-27-0193

e-mail: jaddo@po2.synapse.ne.jp

ホームページ: <http://www2.synapse.ne.jp/jaddo/>

鹿児島県川内市神田町11-20 若松記念病院内

会長 帖佐理子 事務担当 宮脇美智子